

# カントウータ

## Cantuta

## No.11

平成 19 年 10 月 15 日発行  
社団法人日本ボリビア協会

### 協会からのお知らせ

#### 野原昭子さんへの寄付

10 月の民法テレビ番組で、ボリビア・コチャバンバ市で、障害児の自立支援のリハビリ施設「サン・マルティンの家」を主宰する野原昭子さんの活躍が紹介されました。

この番組を見られた方から多数の照会がありました。中には 30,000 円を野原昭子さんへ送って欲しいとご寄付も寄せられました。残念なことに個人情報保護法の故か、銀行ではそのお方の住所・電話番号を教えてくださいません。ここに紙面をかりて厚くお礼申し上げます。

また、番組をご覧になられた当協会のソプラノ歌手・宮良多鶴子さん、ならびにボリビアンチャリティゴルフクラブの会員の皆様より、それぞれのチャリティ基金を野原さんの施設の支援に使って欲しいとのご要望がありました。それにお応えすべく、現在、野原さんに送金につき照会中です。

#### 伴井さん来訪

10 月 9 日海外日系人協会の研修制度によりサンファン移住地の資料館の活性化の研修で来日されている伴井基三恵さんが来訪され、当協会の編集委員の方々と意見交換されて後、会食し、楽しい親睦会となりました。

#### 新大使歓迎昼食会

新任の安次嶺ボリビア国大使の歓迎会を 4 月 19 日明治記念館において、林屋会長以下各理事が出席して、行いました。

大使の飾らない人柄と仕事に掛ける熱意に出席者全員が感銘を覚えました。

また 4 月 25 日皇居に信任状を提出した安次嶺新大使がその日の午後に主催したカクテルパーティーには林屋会長・渡邊専務理事等が出席し、同大使はじめ列席の中南米各国大使と親善をはかりました。

#### 安次嶺ボリビア国新大使 尾身ボリビア議員連盟会長を訪問

安次嶺新大使は嘉手苾ボリビア国名誉領事の案内で長嶺理事と共に、ボリビア議員連盟の会長である尾身財務大臣を訪問した。



長嶺理事・大使・尾身大臣・嘉手苾名誉領事

## 平成 18 年度の事業の概略

平成 18 年度は下記のような事業を行いました。これらは、各理事の完全無償によるボランティア活動および寄付金によりなされたものであることを報告します。

1. Amistad Internacional de Peru y Bolivia (平成 18 年 4 月 30 日)  
ペルーおよびボリビア関係者が 400 人近く参集し、鶴見会館で開催されたフィエスタに参加し、皆さんと交歓しました。
2. 定期総会の開催 (平成 18 年 6 月 23 日)  
詳細は議事録にて報告済みですので省略します。
3. サンタクルス市中央日本人会創立 50 周年事業への協賛  
標記の行事に対して寄付金を募りましたところ役員各位の外に宮良多鶴子様・島袋陽子様よりもご協賛いただき、総額 128,000 円を進呈しました。
4. ボリビア独立記念日コンサートを主催 (平成 18 年 8 月 6 日)  
当協会員でソプラノ歌手の宮良多鶴子さんの「ボリビア公演報告コンサート」を開催しました。当初計画したチケット代より大幅に値下げし、会員の参加を図りましたが、結果は数名にとどまり、イベント事業の難しさを痛感することとなりました。大幅な赤字となることを皆様の寄付金および協賛広告料等により収支トントンでどうにか切り抜けました。
5. カントゥータの発行  
例年どおり年 2 回の発行をし、また臨時グラビア号を 2 回発行しました。
6. 世界ウチナンチュー大会に参加 (平成 18 年 10 月 11 日から 1 週間)

5 年に一度の大会が沖縄県で開催され、世界各国から同県出身者約 4500 人が来日。ボリビアからも 40 人が参加しました。JICA 沖縄センターの会場にボリビア関係者が約 60 名参集。当協会からも三理事が出席し、来日された方々を歓迎しました。

7. 日本大学国際関係学部の文化祭 (平成 18 年 11 月 5 日)  
三島キャンパスで行われた文化祭の「ボリビアの日」のイベントではコロニア・オキナワにホームステイした福井ゼミの学生から体験報告があり、その後にパチエック臨時代理大使および当協会渡邊専務理事のボリビアに関する講演があり、続いて宮良多鶴子さんのソプラノコンサートが開催されました。
8. チョケワンカボリビア国外務大臣来日歓迎会 (平成 18 年 11 月 13 日)  
来日されたチョケワンカ外相の歓迎会に参加して交流を図りました。
9. 「コロニアオキナワ支援チャリティゴルフ大会」への協力 (平成 19 年 2 月 11 日)  
沖縄で開催された同大会には当協会理事・ボリビアンチャリティゴルフクラブのメンバー等が出席しました。
10. モラレス大統領の歓迎会 (平成 19 年 3 月 5 日)  
来日されたモラレス大統領の歓迎会が当協会理事である小川在大阪名誉総領事および嘉手苅在沖縄名誉領事の肝いりにより虎ノ門パストラルで開催され当協会からは大貫副会長・渡邊専務理事・長嶺理事および会員の方も多数出席しました。
11. モラレス大統領歓迎昼食会の主催  
当協会主催でモラレス大統領の歓迎昼

食会を国際文化会館で行いました。大統領が一番くつろげたとのことで大成功でした。出席役員には経費相当額を寄付して頂いた外に林屋会長・田中相談役より多額の寄付を頂き寄付金収入計¥220,000、支出計¥227,373でした。

## 12. チャリティ基金の創設

東京のボリビアンチャリティゴルフクラブより、平成 18 年度のチャリティ活動分として¥126,740 ソプラノ歌手宮良多鶴子会員よりボリビアの子共達へということで¥80,000 の寄付を預かりました。資金の性格上から、特別会計として「基金」を創設し預かり金に計上しました。

## 総会議事録送付

平成 19 年度の社員総会が 5 月 24 日に当協会の事務所のある第一西脇ビル会議室にて開催され、平成 18 年度の事業報告および収支報告ならびに平成 19 年度の事業計画と収支計画が承認されました。

報告が遅くなりましたが本カウンターの最後に議事録を掲載しました。議案書は総会開催通知に添付したものと同じですので、経費節減のため省略させて頂きました。ホームページにて全てを公開予定です。

## ボリビアの話題

### 春の叙勲

2007 年春の叙勲で、ボリビア国の元ラパス日本人会長木村翰由(70)さんが旭日双光章を受賞いたしました。当協会の社員総会に来賓として出席した同氏は、ボリビア情勢につき講演。総会で満場一致で、当協会の名誉会員に推挙されました。

## コカの葉を国章に、 オリーブは旧「支配国の象徴」

ボリビアの憲法制定会議で、国章にコカインの原料となるコカ葉を採用する案が検討されていると現地紙ラソンが報じた。

ボリビアはコカの生産量が世界第 3 位で、伝統的に薬や飲料として利用してきた。現在の国章は、国の象徴であるリヤマやアンデス山脈の上にCONDORがあしらわれているが、問題とされたのはCONDORの脇に飾られたオリーブと月桂樹。制憲議会コカ委員会の提案者は「オリーブは(旧支配国)スペインの経済資源で、月桂樹はローマ帝国のシンボル。ボリビアにとって何の意味もない」とし、「忍耐と国民経済の象徴であり、古来神聖視されてきたコカの葉に変えるべきだ」と主張している。

(ABJ 通信から)

## ボリビア・日本友好の橋の引渡し

2007 年 3 月 16 日午前 10 時より、ピライ河に架かる橋、正式名称は「puente de Amistad Boliviano Japonés」ボリビア・日本友好の橋」の改修工事の落成式が挙行された。

この俗にいうピライの橋は 2005 年 11 月までは正式名称はアイゼンハーバー橋であったが、1950 年代にアメリカの協力で建設され、日に大小 1 万台以上の車両が利用し、老朽化が著しかったところ、日本政府の約 300 万ドルの援助で改修されたことから「ボリビア・日本友好の橋」と改名する運びになった。工事はハザマ建設会社が請け負い、橋けたの強化、10メートル毎にあるつなぎ目の強化、両端の橋けたの

玉石による補強、橋の舗装工事などで、見た感じでは、鉄橋のペンキも塗装されて、まったく新しい橋のようになっている。

(EL DEBER から)

### 駐日ボリビア大使にアシミネ氏 - 責任の重さ・ヒシヒシ! -

駐日ボリビア大使に就任のハイメ・アシミネ・オオシロ氏(49) = 日本名・安次嶺正勝 = は、戦後移住者子弟で、オキナワ移住地生まれの二世。「在任中は観光、文化、特産品などの奨励、ボリビア鶏肉の日本への輸出実現にも努力したい。二酸化炭素削減問題などに取り組みたい」と抱負を述べた。ボリビア中央政府には、戦後移住者子弟としてサンファン日本人移住地出身の長谷倫明(ながたに・みちあき)下院議員 = 長崎県系 = が活躍しているが、沖縄県系人としては安次嶺氏が初めて政府の要職に就くことから、日系社会でも注目され、期待も大きい。

安次嶺氏は「日系人である自分をボリビア政府が大使に任命したのは日本政府および日系社会への感謝の気持ちも込められているのではないかと思う。期待の大きさと責任の重さをひしひしと感じている」とコメントした。安次嶺氏は1958年1月11日、オキナワ第一移住地で生まれる。サンタクルス市内の小中高を卒業後、オルコ県にある国立大学で機械工学を専攻、大学卒業後は89年から99年までアシミネ・モーターズを経営し自動車整備に従事。99年から2006年まで市内にあるトヨタ車販売会社のアフターサービス部門の部長を務めた。家族は妻コリナさん(45)、長女晴美さん(15)、長男安寿君(11)、次

女イリスちゃん(七つ)。

父親の故安次嶺太郎さん = 小禄出身 = は、琉球政府政策移民の第二次移民として1954年9月14日、うるま移住地に入植。原因不明の熱病、通称うるま病が発生したため、パロメティア地域に移動するも土地取得問題で現在のオキナワ移住地に移動している。大城良子(故人)さんと結婚し長男ハイメ、次男マリオ、三男ロヘリオの子宝に恵まれた。

比嘉次雄ボリビア沖縄県人会長は「沖縄県系二世の安次嶺さんの駐日大使任命は大きな誇りです。在任中はボリビアと日本の友好親善、沖縄県との交流がさらに深まるよう活躍してほしい」と話している。(沖縄タイムス 2007年3月3日記事掲載)

### 第182回ボリビア独立記念日

8月6日(月) ボリビア国独立182周年を記念する式典がボリビア・サンタクルス市中央プラサで行われた。午前9時に開会し、ボリビア国歌の斉唱に続いて市内主要機関長のことばが述べられ、サンファン学園と公立校の生徒による詩の朗読やボリビア民族舞踊が披露された。式典の最後に伴井市長は挨拶の中で憲法改正議会にサンタクルス県内の市町村団体代表として出席したことを報告し、また、その前日にモンテロで行われた「Abrazo Norteno(北方住民抱擁の会)」と同じように、観衆に、共に手をつないで友好と団結を促した。その後、主要団体による行進が行われ、全てのプログラムが終了したのは午前11時過ぎ。(ABJ 通信 2007年9月号 掲載記事)

## じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで NO.11  
杉田房子  
旅行作家

その口バの長い列を引いて、スペイン軍の輸送隊はクルーセスの町に着く。パナマ地峡を横断する王の道の、ここは中間に当たった。教会の塔が立ち、スペイン軍の硝所があり、倉庫が並ぶ。川幅をひろげたチャグレ河畔にある町は、地峡を往来する人と物の中継点だった。

土地のインディオの集まる市場があり、輸送隊の将兵が女漁りにふらつけば、人夫のインディオは腹一杯に飲み食いする。インカの男女は、ここでも好奇の目に取り囲まれた。腰にミノ草を巻いたほかは裸同然の土地のインディオは、肌色も顔形も似ているのに言葉一つ通じない男女を眺めまわす。飲み食いしていた人夫のインディオが物知り顔で説明した。

「南のペルー、インカの国からきた奴らだ」「インカ！」裸の群集は、その一言で静まり返った。同じチブチャ語族でも、太平洋岸のインディオは海原にさえぎられて、地続きなのに南の方のことはあまり知らない。けれど、聖プラス山脈沿いに住む者は山伝いの南のコロンビアに住むチブチャ語族と、その南隣のアラワク語族とを通じて、アンデスの帝国インカを知っていた。

「インカだと」群集から老人が割ってでた。「それなら、白い食べ物あるか。太陽か月のように白く、腐らない永遠の食物」人夫のインディオの手真似で、黒と白の石そっくりな乾燥じゃがいもを、インカの男女は口バに積んでいた袋から取りだした。

チュノを見つめて群衆はざわめき、老人がつぶやく。

「インカ。永遠の食物」

じゃがいも食いのパパミククではなかったが、聖プラス山脈沿いのインディオも、主食はイモだった。ヤムイモが主で、サツマイモとじゃがいもに似たものも植え、市場にも並んでいる。しかし、ごつごつした不恰好さといい、湿気で黒く濡れた肌といい、アンデス山地のパパスはもちろん平地のものとも全然違う。べちゃっとしていて、からからに乾いたチュノにすることなど思いもよらない。はるか数年、この地峡にパナマ運河が建設された時、平均すると3万6000人を数えた労働者は、1年間に200万キロもじゃがいもを食べた。ほぼ同量の小麦粉とともに食料消費の王座を争ったことが、1910年の記録にある。澱粉質豊かな満腹感と、さらっとした味とが、混った暑熱の土地で働く者には絶好だった。

「永遠の食物」裸の群衆が、チュノを押しあいへしあい見つめるのを、インカの男女もスペイン軍の将兵もあっけにとられて眺めていた。

「山の上の、木がないところ。開けて風通しがよく、陽の当たるところがいい」裸のインディオに、インカの男女はじゃがいもの植え付けを教えた。白いチュノを見てから、すっかり親切になった礼がわりだったが、アンデス山地と違って、聖プラス山脈の深い谷間にはなかなか格好な土地がない。いつの間にかクルーセスの町を見おろす高地まで登って、気がつくとう東方に海のひろがりが見えた。

「カリブ海だ」

逃亡するのを心配したのか、ついてきたスペイン軍の兵士が、指さしていった。

「お前らが乗る船は、どっちの港へきているかな」

パナマ地峡の東岸に、スペイン人は2つ港を持っていた。カリブ海に突き出したマンザロ岬の北にポルト・ベイヨがあり、南にノンブル・デ・ディオスがある。ポルト・ベイヨは、4回にわたるコロンブスの新世界発見の航海で、最後の1502年に発見された。小高い岬に囲まれた深い入江の奥は白浜と平野で、コロンブスがいった

「ポルト・ベイヨ(美しい港)」がそのまま地名になった。ノンブルディオスはその前年の1501年に発見されている、冒険児ニクエザの船が難破寸前に漂着したところだった。

ノンブル・デ・ディオス(神の御心)で助かったとニクエザはいったが、漂流したくらいだから風がまともに吹きつけ、潮も激しい。

スペイン本国からの船が、どちらの港に着くかは、風次第だった。港としてはポルト・ベイヨがよくて、ノンブル・デ・ディオスならマンザロ岬を大まわりしないですむ。輸送隊に先立ってパナマを出発し、2つの港を駆けめぐった連絡兵が消息をクルーセスの町へ伝えることになっていた。

(つづく)

## ボリビアは心のふるさと

### 食べ物に関するあれこれ (その2) -

細野 豊(詩人)

JICAとその前身に職員として勤務した37年間に、無償資金協力にかかわる基本設計調査等で30数カ国を訪れたが、強く印象に残っているのは、世界中どここの国へ行っても中国人が経営する中国料理店があり、料理がおおむね美味で、われわれ日本人の口に合うことだった。だから、日本食にありつけない所ではよく中国料理を食べた。

サンタクルスにも数軒の中国料理店があったが、中でも美味しいとの評判が高かったのが「チナ・ラウ」という店だった。さほど大きな店ではなく大衆的な店構えだったが、料理の味は確かによかった。ボリビア人たちに最も評判がよかったのは「チチャロン・デ・ポーリヨ(鶏の唐揚げ)」だったが、私自身が今でも美味しかったと記憶しているのは「焼きそば」である。(最近、横浜駅西口の横丁に入った小さな店で、中国人のおやじさんが作る柔らかい麺の焼きそばを食べたが、見てくれも味もよく似ていた。)

「チナ・ラウ」の主人は、ボリビアへ移住して来る前は中国国民党軍の将官だったとのことで、いかにも軍人上がりらしい堂々とした体格の持ち主だった。

2000年にサンタクルスを再訪した折に、あの懐かしい味を再体験したいと思い、現地在住の日本人の知人に尋ねたところ、料理名人の主人はすでに台湾へ帰国してしまい、息子が後を継いでいるが、味は父親に及ばないとのことで、別の小

---

きれいな中国料理店を紹介された。

小きれいな店をあまり好まないという私の偏見も影響してか、味にはいまひとつ満足できなかった。

横道にそれるが、例外の話をしよう。中国料理が旨くない所のことだ。それはどこかと言えば、メキシコ市である。この一千万を優に超える人口を抱えた世界最大の都市には、1985年から89年までと95年から98年までの2回にわたり8年近く滞在したが、中国料理店は数軒しかなく、しかも美味しいと言える料理を供する店はほとんど皆無だった。なぜ美味しい中国料理店がないのか？はっきりしたことは分からないが、メキシコ市は海拔2,500米ほどの高地であるため、水が100度になる前に沸騰してしまう環境なので高熱を必要とする中国料理に向いていないのかも知れない。(帰国間近の98年頃、高級住宅地区のポランコに立派な店構えの中国料理店が店開きしたが、味はまあまあという程度だった。)

ところがこの大都市には、当時日本料理店が百軒近くもあり、本格的な日本料理が食べられる店も少なくなかった。今でも状況はさほど変わっていないと思われるので、余計なお世話かも知れないがメキシコ市へ行かれる日本人の方々には中国料理店は避けて日本料理店へお出でになるようお勧めする。もちろん、メキシコの民族料理であるタコスやカルニータ(仔豚の丸焼き)などもぜひ召し上がっていただきたいが...

話をボリビアへ戻そう。サンタクルスからモンテロ、ポルタチュエロを経てサ

ンファン移住地へ行く途中、国道から右へ入ってすぐの、移住地の入り口の集落の小屋掛けの食堂で食べたホッチ(大型の鼠の一種)の肉は旨かった。豚肉に似た味だったが、身が締まっていて、しこしこ歯ごたえがよかった。こういう物は、ボリビアにいたからこそ食べられたので、日本にいたのではとてもありつける代物ではない。

肉と言えば、ボリビア人の親友で画家のMが彼の家に私と家族を夕食に呼んでくれたとき、ベルギー人の奥さんが作ってくれた料理が忘れられない。それは、牛の頭丸ごとの蒸し焼きだった。作ってくれた方としては、日本でお頭つきの鯛を出すのと同様の感覚で最高のもてなしをしてくれたのだろうが、私と家族は迫力に圧倒され、口数が少なくなってしまった。牛が恨めしそうにこちらを睨んでいたという記憶はないので、目玉はついていなかったのだと思う。

欧米人は、日本人が知能指数の高い鯨を食べるのは野蛮で、スッポンを生きたまま料理したり、生き血を飲んだりするのは残酷だと非難するが、所詮は文化の違いということだろう。

人間も含めて全ての動物は、自分よりも弱い生き物(動物や植物)の生命を奪って食べなければ生きてゆけない宿命を背負っているのだ。

(次号につづく)

## **親の想い、子の選択**

### **第2節 研究の方法**

武庫川女子大学 生活美学研究所  
助手 柏木 舞子

この研究に必要な資料は、関連する文献調査のほか、つぎのような方法によって採集した。

まず、2002年9月下旬から11月上旬までの期間に、のべ2週間にわたる日本国内での野外調査を行った。このとき、情報提供者として協力してくれたのは、ボリビアからの「出稼ぎ労働者」として横浜市鶴見区に居住している、コロニア・オキナワを出身とする日系人である。この人物からの聞き取り調査によって、ボリビアの日系社会に関する予備知識を得ることができた。

その後、2003年6月中旬から約3ヶ月間、ボリビアのサンタクルス州を訪問し、コロニア・オキナワに居住しながら、参与観察調査をおこなった。その詳細な内容は、以下に列挙する通りである。

#### **人生の転機における「決断」 ライフ ヒストリー採集による**

この問題領域にかかわる基本的な文献のひとつに、石田甚太郎著『ボリビア移民聞書』（現代企画室、1986）がある。この文献には、実際に移住地を訪問した著者の見聞が、詳細に描かれている。その中には、ボリビア人をこきおろす日系1世の発言が多数、採録されている。つまり、彼らは「働かない」「浪費する」「うそをつく」、さらには「自分の子どもが、ボリビア人と結婚することを恐れている」というのである。

現地での聞き取り調査においても、同様の意味を持つ発言を幾度となく耳にした。

これに関連して、筆者自身が日本国内で知己を得た日系2世の女性は、

「ボリビア人と結婚するときには、家族と縁を切る覚悟だった」

という意味のことを述べた。

このように人生の転機において、日系1世と2世の価値観の相違は、深刻な争いの契機となることがある。そうしたジェネレーション・ギャップについて、ボリビアからの帰国移住者、コロニア・オキナワ在住日系人のライフヒストリーの採集を通して描出・分析した。

#### **日系人家族の日常生活と子どもの「しつけ」 参与観察による**

コロニア・オキナワで生まれた日系2世は、口をそろえて、

「親のしつけが、とても厳しかった」

と述べた。家庭では、多くの場合、日本語もしくは沖縄方言を話し、沖縄料理を中心とした食事を摂ったという。

それに、少しでも派手な服装をしたり、ボディランゲージを交えて話すと、

「ボリビア人の真似をするな」

と叱られた経験を持つ者も少なくない。

つまり、学校教育を通じてボリビア人と接する日系2世には、ボリビアの文化を受容することへの抵抗感が少ないらしい。それに対して日系1世は、家庭内の環境を「日本、とりわけ沖縄そのもの」の状態に維持しようとする。ここに世代間の葛藤や相互の違和感が生じるように思われる。

こうした「違和感」があるはずの日系移住者の家庭を訪問し、日常生活習慣や子弟のしつけに焦点をしばって参与観察を行なった。そのことによって「日本・沖縄・



---

ボリビアの文化」の相互関係とそこに作用するダイナミクスを、自分自身の体験を通して確かめながら分析した。

### 日系人学校の教育 聞き取りと参与観察とアンケートによる

日系人からの聞き取り調査をしていると、彼らは自らの語学力について、「日本語も、スペイン語も、ともに中途半端だ」と嘆いた。実際「話す・聞く」ことには堪能であるが、「読む・書く」という能力は貧弱である。しかも、いずれの言語に関しても「純粋な日本人」「純粋なボリビア人」に比べると劣っていることが歴然とする場合が多い。

コロニア・オキナワには、オキナワ日本ボリビア協会が運営する2つの小・中学校がある。居住区域ごとに、いずれかの学校が選択されている。これらの学校では、午前中はスペイン語を用いてボリビアの公教育が、午後には日本人・日系人の教員による日本語の授業が、それぞれ行われている。日系2世・3世は小学校の5年課程、中学校の3年課程を終えると、市街地にある4年課程の高校へと進学する。そこでの授業は、すべてスペイン語で行なわれている。

ボリビア社会で生活するには、スペイン語が必要不可欠である。とくに将来もボリビアで生活を成り立たせたいと考える日系2世は、スペイン語の教育に、より大きな比重を置く。しかし他方、今なお日系1世の間には日本語を大切に想う志向性が強い。

コロニア・オキナワにおける日本語を中心とした日本的な教育の是非と可否は、移住地であるボリビアへの彼らの同化の是非と可否にも直接、深く関係する。こうした問題に一定の解答を得るため、移住地の

小・中学校を訪れ、その教育実態を観察し、教員をはじめ、関係者との面談の機会を持った。さらに、その内容を客観的に意味のあるものにするため、そこで実施されているカリキュラムをはじめ、教科書・時間割・指導要綱などに関連する資料を収集・分析した。そのことを通してコロニア・オキナワの次世代を担う人材の初等・中等教育の現状を捉え直すことができた。また、就学児童生徒ならびにその親を対象としたアンケートを実施し、移住地における教育の理想と現実のギャップを明らかにした。

### 編集後記

「カントウータ11号」の発行が遅れましたことお詫び申し上げます。役員会に総会、行事が続くこの時期は皆様のご多忙、作業はなかなか進みません。5月24日総会開催日に、ボリビア・ラパス在住の木村由さんが事務局を訪ねて下さいました。

木村さんは元ラパス日本人会会長を長年勤められた実績が認められ、平成19年度春旭日双光章を受章、来日され当協会にもおいで下さいました。その折に最新ボリビア事情をお話いただき、新大統領の政治手腕や日系人の活躍の様子を知りました。

現在住んで体験していただける方のお話は興味深く耳を傾けておききました。ボリビアからお帰りの方や一時帰国の方など、ご多忙でしょうが時間がございましたら是非事務局へお立ち寄りいただき、ホットなお話をおきかせいただけましたら幸いです。

(編集委員)

杉田房子委員長、大貫良夫、細野 豊

(広報委員)

渡邊英樹、長嶺為泰、金木克公

## 定期総会議事録

平成 19 年 5 月 24 日午後 3 時 30 分より、当協会事務所のある第 1 西脇ビルの会議室において平成 18 年度の定期総会を開催した。

渡邊専務理事より資格審査の公表がなされ

出席者：山下徳夫、田中 茂、林屋永吉、大貫良夫、杉田房子、渡邊英樹、今村忠雄、小川秀樹、嘉手苺義男、金木克公、佐々木仁、白石健次、高畑敏男、長嶺為泰、細萱恵子、細野 豊、渡邊英一郎、

西脇商事(有) 計 18 名

委任状：25 名 合計 43 名

総社員数： 70 名

上記のとおり過半数に達し本総会は適法に成立いたしました。

議長に、会長林屋永吉、議事録署名人に今村忠雄、細野豊が選出され議事に入った。

第 1 号議案：平成 18 年度の事業報告及び収支決算ならびに財産目録の承認の件

議長の指示により渡邊専務理事が詳細なる説明を行った後に、佐々木仁・金木克公両監事より「すべて正しく適法に処理されている」旨の監査報告がなされ、総会開催通知に添付したとおりの議案書をもって満場一致にて、これを承認可決した。

第 2 号議案：平成 19 年度の事業計画及び収支予算の承認の件

総会開催通知に添付した収支予算書の前期繰越金額に誤記入があったので、これを前期決算書の次期繰越金額と一致させる訂正を行って、本案を満場一致をもって、承認可決した。

第 3 号議案 名誉会員の承認

渡邊専務理事より、旭日双光章受章のため来日し、本日、オブザーバーとして本総会に出席された元ラパス日本人会長：木村翰由氏をその長年の功績により、当協会の名誉会員に推挙したいとの動議提案があり、審議の結果、満場一致をもって、これを承認可決した。

議長林屋永吉は、これをもってすべての審議が終了したとして、午後 5 時閉会を宣言した。

平成 19 年 5 月 24 日

社団法人 日本ポリビア協会

議長 会長 林屋 永吉 印

議事録署名人

理事 今村 忠雄 印

理事 細野 豊 印